

文

化

「大学とは何か」を根本から問い直す映画や討論会、雑誌の特集、専門書が相次ぎ、「大学論」が熱を帯びている。1990年代以降の一連の大学制度改革で環境が激変し、とりわけ人文学分野の危機感が深まっている。

人文学に変化

「グローバル資本主義の時代、人文学の永続性や哲学への権利はどんな研究教育制度で保持されるのか」。そんなことを考えさせる映画「哲学への権利」の全国巡回上映がこのほど始まった。フランスの哲学者、ジャック・デリダらが83年にパリに創設した研究教育機関「国際哲学コレージュ」を巡る初のドキュメンタリーだ。

監督した東京大学の西山雄二特任講師は「いま大学はどつあるべきなのか、広く話し合うことが

と語るのはパリ第8大のフランソワ・ヌーデルマン教授。受講生に学位は授与しない。講師が無報酬なら、学生も無料。無償性の原則に貫かれたコレージュは「大いなる自由の場」で「知的興奮の場」とされる。

「コレージュの試みの成否ではなく、そこに込められた問いをくみ出したかった」。西山氏の問題意識の背景にあるのは日本の大学、とりわけ人文学をめぐる危機的な変化だった。

「91年の学部カリキュラムの自由化が招いた教養教育の衰退、2004年の国立大の独立行政法人化による効率重視の雰囲気（強まり）」。38歳の西山氏は改革の影響を大学院生時代から肌で感じてきたという。「大学が自由を失っていくような大きな圧迫感を抱いた」

「思想上は必ず討論の時間を設けて、観客と意見を交わす。21日に国際基督教大学（東京都三鷹市）で開いた会に参加した同大の佐野好則上級准教授は「コレージュは一つの奇跡。大

学や人文学の理想を考える参照点になる」と評価した。

「思想を生み出す場所としての大学の变化は大きな関心事」と「現代思想」の池上善彦編集長。実際、大学論の特集号は通常より売れ行きが好調という。「改革が動き出

してから時間がたち、大学の理念を再考する機運が出てきた」と池上編集長はみる。

大学とは何か問い直す

しばむ自由 危機感強く

教養の拡充提言

日本の失敗学ぶ

「(学内外の)人々が自由に交じり合い、コミュニケーションが可能になる場所」こそが本来の大学と主張。喫茶店で開く自由な研究会など、非制度的な活動の価値を説いている。

研究機構の金田章裕機構長も「改革には長期的見通しが必要」と強調。「理念を持って制度設計しないと大学や学問はダメになる」と警鐘を鳴らす。

思想誌「現代思想」は昨年9月号、今年11月号と1年あまりの間に続けて大学論の特集を組んだ。11月号では龍谷大学の村沢真保准教授が

木武徳所長が著した「大学の反省」は展望を欠いた改革を批判し、教養教育の拡充などを提言して注目された。猪木氏は「大

阪府立大学(堺市)は文系学部を事実上廃止し、理系に特化する改革案をまとめた。民主党政権の

映画や書籍...討論会にも熱気



インタビューに答える哲学者のミシェル・ドゥギー氏(映画「哲学への権利」の一場面)

効率重視の制度改革に警鐘

「(学内外の)人々が自由に交じり合い、コミュニケーションが可能になる場所」こそが本来の大学と主張。喫茶店で開く自由な研究会など、非制度的な活動の価値を説いている。

「思想を生み出す場所としての大学の变化は大きな関心事」と「現代思想」の池上善彦編集長。実際、大学論の特集号は通常より売れ行きが好調という。「改革が動き出

してから時間がたち、大学の理念を再考する機運が出てきた」と池上編集長はみる。

「思想上は必ず討論の時間を設けて、観客と意見を交わす。21日に国際基督教大学（東京都三鷹市）で開いた会に参加した同大の佐野好則上級准教授が

文化部 館野真治